



JR東労組

長野

自立 信頼 創造 発信

第273号

東日本旅客鉄道労働組合長野地方本部

●発行人 古畑隼人 ●編集人 大槻孝一

長野市中御所1-21-8

NTT(026)224-4145 JR(067)2590

1部20円(組合員の購読料は組合費に含む)

長野地本第35回定期大会



第35回定期大会

東日本旅客鉄道労働組合長野地方本部

日時:2019年7月11日 場所:長野バスターミナル会館

古畑委員長挨拶(要旨)



この一年間、新生JR東労組運動を目指し活動してきた。その結果、4名の仲間の再加入を勝ち取ることができた。しかし、バス職場においては多くの仲間が脱退をしてしまった。おそらく不当労働行為によって起きたのだと思う。また、脱退者が脱退を促すといった事象があった事も聞いている。こうしたことから東労組の仲間だけでなく、脱退してしまった仲間からも職場内がぎくしゃくしているという声を多く聞く。会社はこのような事から社員から信頼を大きく失っていると感じている。

ある職場では、今でも不当労働行為やコンプライアンス違反があると聞いている。管理者が率先して不当労働行為をしていたり、1カ月に何十時間もサーブス超勤をしている管理者がいる。そして、現場長は黙認しているように見える。このよう

な姿を若い社員が見たらどう思うでしょうか。自分の出世のためには不当労働行為をしてもいいのだ、会社は都合の悪いことは表にださないと思いついてしまっている。このような会社のコンプライアンス違反を労働組合として認めさせ、引き続き労働組合としてチェック機能を果たし、働きやすい職場を守って行く。

今、現場ではジョブローテーションについて組合員の意識が集中している。変革2027では会社は経営環境の変化を危機感としてとらえ、会社が将来にわたって成長していくための考え方が示され、社員に対して意識改革を求められている。経営資源の振り向けかたを変えたJR東日本の内的変化に対して、労働組合としてどのように立ち向かうかが問われている。更なる労働条件の向上と働きがい高める施策にしなくてはならない。全組合員の更なる議論をお願いしたい。

6月13日の第38回の本部定期大会において「スト権に頼らない、全組合員と共に歩むJR東労組をつくらう」という追加スローガンが出され、これに対して様々な意見がある。山口委員長は、1つ目は組織実態から出発して組合員が離脱していった理由を明確にし、同じ過ちをおささないため、2つ目に、「新生JR東労組運動」を掲げてたかかっていく。組合員が「本場に東労組は変わった」という自覚を持ち、離脱していった組合員の再結集につなげていくため、3つ目に私たち自身に問われることで、組織が「自分の力」でたかかうためには組合員と共に歩むことで、方針ありきでなく指導部の強化を通じて組織の強化を実現することであり、一年間苦しんできた中で打ち出したものであると述べている。

今だからこそ、12地本が総団結し、矢継ぎ早に打ち出されている施策に対し立ち向かっていかなければいけない。

第35回定期大会の成功に導いていただくように、代議員、傍聴者の皆さんの活発な議論をお願いします。

加藤書記長挨拶(要旨)



ジョブローテーションにおいて団体交渉を重ねてきている。安全性や雇用の確保、労働条件の向上といった条件については絶対譲らない姿勢で挑んでいる。雇用確保については終身雇用、年功序列賃金についてはいまままで同じであること、出向前提ではなく、出向期間は3年ということも会社と確認してきている。転職については自己申告書に基づく本人の希望を尊重することや育児や介護、病気等の個別の事情に配慮し「同一担務期間が最長でも概ね10年としているが、10年には限らない場合がある」ということを確認した。

この新規採用に対して危機感を持っていることが感じられ、これからの将来が不安だと思われている。鉄道事業に固執しない人材をつくりたいという人材が多様化する。この施策を受けて、反対の行動だけしていれば職場の仲間が取り残されてしまう。いかなる施策でも安全を忘れない。転職についてはジョブローテーションは、営業、工務、バスの仲間にも波及して行く問題である。組織力を再構築することが大切であり、いろいろな施策に対しての問題解決のために東労組は必要である。

この一年間さらなる脱退や、役員経験者の脱退など苦しい体験がいくつもあったが乗り越えてこられた。分會活動は職場が分散しておりなかなか思うように進まなかったが、2月に行われた第38回の定期委員会では業務問題を中心に活発な議論ができた。このことから、組合員が集まり議論する場があることの重要性を改めて実感することができた。

組織問題は組織を弱体化させる。9地本対3地本という体制になっている現状を早く解決し12地本総団結しなくてはならない。新たな施策ジョブロー

奥山書記長総括答弁(要旨)



この一年間さらなる脱退や、役員経験者の脱退など苦しい体験がいくつもあったが乗り越えてこられた。分會活動は職場が分散しておりなかなか思うように進まなかったが、2月に行われた第38回の定期委員会では業務問題を中心に活発な議論ができた。このことから、組合員が集まり議論する場があることの重要性を改めて実感することができた。

組織問題は組織を弱体化させる。9地本対3地本という体制になっている現状を早く解決し12地本総団結しなくてはならない。新たな施策ジョブロー

最後に、現場と共に歩んで行くことを約束します。

第35回定期大会 スローガン

- ・ JR東労組の存亡をかけ、未来を切り拓くために、12地本が総団結し、全組合員と共に組織の信頼回復と強化・拡大を実現しよう!
- ・ スト権に頼らない、組合員と共に歩むJR東労組をつくらう!

第35回定期大会にお越し頂きました来賓の皆さま

〈中央本部〉

- 加藤 誠様 (書記長)
- 銭谷 公太様 (組織研修担当部長)

〈長野地本OB会〉

- 近藤愛一郎様 (会長)
- 上原 隆様 (事務局長)

職場からの運動をもとに新生JR東労組運動をつくらう!